あり　濮潛彩懷戴氏曼公賁笈向日東不歸とふ乃
詩あり次年七月善照國師聘ゆ応ぜず東海して大ゆ法
威を振ふ時ゆ獨立年已六十ゆをくゆくゆく命いくぞ
うあるまづうゆ寢食して殘喘を畢らんのことて自出家して
善照國師ゆ陶せり薩摩八郎勝久ハあるれり名を性
易字を獨立天外一同人と号せりその傷を棄て粥ゆ陶
るの好きつねゆ清勝を愛ゝ風流ゆて温藉なり扨ゆ
うるさくざるとと昔日ハ高氣慷慨なるゆハたるて似ず憐
務をあゝ撰ひゝ典籍を治めうゝ識者云賛地の流亜れ
果という明暦乙未の八月夢ゆ法侍ゝ書記を賞り
第治元年九月國師ゆ侍ゝ法ゆ來まゝバ附人獨立

の才徳ハ美のすゞれたるを嘆賞せざるハかゝくゝ故
ありゝ獨立病ゆ託ゝ長病ゆうれりその侍地を按ぶ
して居住ゝさて術風ゝ居ゝ治ゆ方を視ずとく
業を施すゆ効あり國こそりて邪と稱せり者て云人および
和を清ゝとハ善藥の幸彩なるハ撰ゆ應ゝて施ゝ用
ゝゝというまゝ書を善くせり著述少なりてハ書法
を用ひ古ゆ爲ゝ非氣含あり人ゝれ斤紙隻字をなて
も珍藏せざるれゝ種玉の墨跡ハ如く蓋ゝ絶品あり
きゝゝ善照國師を省覲せとせゝ途のそどゆ病
ゆ田ゆ平生健喫あゝと壯年のものゝくありゝこ
の附食ゆ減ゝれバ衆人美を勸むとゝども聽ゝ

以松孔多り病よハあるゝゞ何ぞ業を服するとせんとゝゝうゝ
くゝ拙よ卧ゝゝ吟哦こゞゝ嬉めり一朝筆をもとめゝく
書を製ゝゝ塵ゝ傍海邦不忘殘夢繞空軒唫任他海折
梅花影接却江南白玉魂とゝき終りて溘然ゝゝゝ逝セ
り容貞女不生ゝゞ如ゝゝ享年七十七歳時寛文十二
年十一月廿日なり遺状十五条頭ゝゝゝ天外老人集ゝゝ

松雪禄師

松雪禄師ハ肥前國の人なり生れて奇の徴あり父ハ田氏松
雪年六歳なやく假字を知れり松雪十歳のとき父ハ俄
かに死て夢ゝよりなり華嶽公ハ礼すれより先ハ一夕
公夢ゝゝゝ童子あり殿中善陀大王の肩ハ跨がりと
見ゝ覚ゝゝり松雪の見やるゝ却びく前夢の童子と異
なるとゝ思ゝりゝ孔ハ公ゝゝゝ孔ハ公ゝゝゝ孔を奇として法器なりとれ
をひ乞ひく弟子とゝ名を宗聯とゝゝり松雪ハその学
なり松雪ゝゝく諸沙弥の中ハあるて屹然ゝゝて雅松の嘗
葭を起やるゞ如く考りとぞまく学を好こ衆事ハ役ゝ
たゝゞゞその綱水を汲ゝ山薪を採るの力を盡すべきの附も
松雪いさゝゝも屑とせゞこゝをもて翁然として疎懶の名
を負へり嶽公為ハこれを解きく云癡なりとて罪しみハ
ず松雪性異なりて人事ハ明そゞゝなるも癡と如ゝゝゝ
ゝされバ学を好めゝゝゝハ癡をもて樂とせゝなりまさ知ゝ
を善くせり弦凡人の影を踏ゝゝその人と為ハ温茶孫遜讓

及る者嘆歎せざるなし〳〵年二十一歳長崎に遊だんとせしが
たゞさへ〳〵亜師達ちに遊学し一支院に住せりあさ
関東に往きて洞流の諸老に渇〳〵暇あれば講肆に参りしき
て経義を受けいさゝか虚名あるとなく〳〵さて貧〳〵に
ゞる憂ふることなくあつく托辞せべ遊方すると凡十年田
氏郷に帰〳〵潜然として〳〵その母に帰省すその
夫を失ひよるべのなく〳〵に松雪の帰るをあひく大に喜び
久〳〵くして松雪長崎の賠奎に適くに母を伴なひく
ちの〳〵に小堂を造り〳〵厚く養ひ〳〵くてある日
母の賠奎に三舎に参りむきたり〳〵に暴雨り来り〳〵れば
松雪初も敢ず母の傘と木屐を携げてちよいと〳〵に



ふ人〳〵あやし〳〵問ふるに我が母の迎ひにおるとこゝに
やどりに途あく行き違ふれば大きに喜び〳〵松雪に市
に出づる毎に魚を買ことをめくそれ母に饋れる肴毎
松雪に来るを見るに縄をもて魚を貫き杖に荷ひ
たゞいふも松雪が法衣かゞるに魚を持てるをやう〳〵愧
ぢ誡めて云釋氏に似つゝかゞとゝを松雪諫
て皆おさ魚を買ひく饋れば再誡むると老のかくか
に〳〵諫〳〵遂に〳〵母に〳〵ひく〳〵その婢に誡り
て云釋氏は厳冬に清泉あんをうる所形あり
釋とゝふべんやとべんを〳〵〳〵戒しむるを孝と謂
べんやとて遺ひく魚を棄させしに松雪その棄

て食せざるを知りて日々を経くまさ僕をして街より魚を買
め饋りたまふ母怒り擲て云ふ誠なると用ずとくやが
く自髪を剃ちろ松雪に告て云ふ今日より尼と為れ名
を妙善と称すべしといふ松雪いとよろこびいそぎ
懐より墨染の法衣を出いでて与へ著せうさて出てその
後ほどなく吾志願すでに満てといふ松雪年五
十五大に法席を啓きたまふ一附の言語つぶひ玉ひ寛文
四年正月小疾りて人常方に居つとめて門人を呼て云
吾今日逝せりとて終に将事を修するその言渾々
て平日に異なることなく午時の後ほどなく西方三聖の
号を唱ふるその声朗々諷一畢て偈を書て云五

十六年随順世縁而散雲歛碧落月圓とき終り例
然と逝すなく著すところ没容事略十五巻天
龍直説一巻禄宗五派圖おあり世に行る

志道軒

志道軒名八栄山深井氏江戸浅草花川戸に住あり幼
より豪爽不羈なり常に奇傑の論を好こと年十二歳にて
祝髪し瑜伽唯識台教律文に通ぬくうねく
史籍を渉猟し名声大に叢席の間に望を二十歳にて
戒を受け律を持すること堅固なりしが久しく戒律
の束縛を桎梏と法衣ふるの形を縲紲とやく厭ひ
く偏に風色場中に遊びて大快活の人となんとを

ぢりひろく遂に還俗せりといへども形圓頂のまゝ自著述し
てその私情にて佛像經卷を散鬻しまたく自肉
の資にあてくろ心を声色に縱ほしいまゝにしたがひ日をすごすまゝに
囊中空しく空しく糊口の計にもとより世路にうと
くうれず飲食の助けをなすことあたはず支離龍鍾殆
餓死せんとするに及びてもとゝ名だゝ高きあるに金龍山
に往きぬるに觀世音菩薩に詣ずるこゝろの老弱男女
雜遝ふしゝく日夜行人の絶ることなく一つに於て嘗然
嘆じて云我舌を不存やうにあらもこの窮に至るまでの我
ふしゝく天にあゝとして遂に自奮りて志を起し淺草
ちの境内喬木樹下に於て林を設け自その上に坐し

曲几に倚りて孔子を展べて古今の治乱興廢とろ武略
の雄畧を講説し縁飾する門外此典籍を以てす口
ハ破盂の如く鼻ひくめき背ぐまり於ろ耳目を驚かさ
んとして如意に代る小長さ八九寸ばかりある陰莖に似た
る木椀を執りて案を拍て戲謔の談論をなす小事お
ろかハ怪誕にとゝまり用ゆる人絶倒せざるハなし所言集
語もまた人口に膾炙せりその席に老弱とゝ群集する
中につきて傳説と婦女のあるを見ては講説にとよせて
面折しゝく罵詈をきかずといふことなし
多くとゝどこゝに美居住者ふくいさゝうも儲ることなし
とゝ自己が肖像を名ゞ印刷しその上に裁言狂

家を書加へて今まあまあ元無州といふ冊子を著し大概その謂ところ陰陽成育化理を述べ允て哉諱の言をもて三教の奥旨を溷説する言と尽くしその考未だ顕する詩あり

謹我

讀史談軍數十春大悲閣下得名新曾夫木扣林頭
日白眼總看世上人

延享戊辰の年

一無堂志道州

そのころ家士華といふ人古の哉作をあつめ
家近金龍山上春　情狂動老欲新指揮夫木談軍
望白眼一閑招幾人

美成云者は執るところの木撥八今已は金剛院は
存ずと云ふそのころ浮世絵師奥村政信といふ者
志ある彩ぐまぐ世はあつまるは世人きそひも
扱い普く市中を驚きあるもむるは世人きそひも
とめしとぞ平生物産の学は博くくろ奇の巧の
少ゑ有ゑ平賀源内名八國倫うく志ある彩ぐ
縱横自在れ故言は冨貴利達を賤とせず人世を
茂視するを言るとし志ある彩ぐ絵を著うつ凌陰
陽急伝といふ書を哉作その考育は志ある彩ぐ肖
像の前はこうづく杉草を捧げ伝ふることを為ぐきて
情ある彩と称しまこと元長州は三我三千年来遊民

とかりき世の人予が名を呼てまら坊といひ笑ひ
ぐさとせるをこころけたのしことす今七十有余年
ごくろうをえくるの人とかりをおもひやるべし添
門ろうくこの元無弁まわとづきて拙弁ばかりの
書前好篇を載侃せりうくく志道軒が狂態を
仕とくく一生涯をおもひもてる実は一個の畸人
といふべし

原雪庵

原雪庵ハ明和年間世に聞えたる妙手の医師なりその
竹馬朋友なる竹田柔拙井在庵といふハもやく医術
をもてくその名一時に高く一郡をかやりうくて雪庵ハ



その二子は術ハたちまちふ超とうといども名高くして物
ふかくもくべ郡を治すに到るくくりはもバある時二子
親友の病を見るふ者のびずして雪庵ふいるやうハそ
のうちハ術ハすぐれさるといふも不孝あるとそん
うられ術をうんたあるに貴人富家ハ交りをむすびあへ
といひはれバ雪庵ニて云二子の志ハかくしかぶるさ
ルどもはれ見るくくに医業物産をのこむねとつ
とめ学びくく世の人ハ諂ひ人ハうるふ方便をバ未あるひ
まるばかれバさる交りハ疎くうとふ二子も詞をく
してやうあまさある方ふくく医師をうえんとありふ雪
庵云おもそ雪術の精しを治療れあるとハ世ハ類ひ

希有の國手名医の名医あり されども生涯放蕩無義にして酒
を好み辯好の雄辯人を向旬を傷ず人をまどわし如し 行状のよ
ろしからざるとも心人をこころうきえあることもうえのみや
そハ別人あらべ所無きありとて大に笑つりくて日を追ひ窮
すといへども あくまで家計をこころとせざるされども業れを
宣めて富有ハ業一貼三分たべ前ゝ傷をとり中
人ハ五分まて無命の日べ〳〵のもれハ二分いつゝくを
おもうある時を期とし〳〵れより以下ときゝ〳〵
て病めるものハ業を施すのみあらべ米穀のてあくま
べ小人を用ひく治療せしとそうくて時とし〳〵浮若と
まく来りつゝるもの幾人と云ことをきべこゝうねく業



を施し治療をうけ〳〵見義ハ教ゆるあり 教行者のをり
ハとまおくり迎ふつまるふものを多りまとりある夏
のとふ〳〵くあ〳〵べ一年べるるもべとくたあく墓参〳〵
たるまをりるる多べれといひおひ繁〳〵草業ハ墳墓のところ
ま知れべまバるものをハ白きとさゝふ声高く垂庵墓参るまま
あるゝとあるゝふ響くべるるまひすゝ傾るとあり平日
の所為おれ数のものを多くるり安永四年十二月廿二日没す 年
天徳寺ハ葬る

吉田雲晁

吉田雲晁ハ尾張庵より先輩まて名医れきこえあるそ
の術ハ國手たりと云べも高人ハ世ハ容られす 窮白

くぎりあるをもれども出てつくをもとむるかもかく安穏自
若ろうく日を送りてあるしがるの家僕よ吉助とゆふこの
あり老夫よていと忠誠よ勤仕りあるを空墨ゞ出よ出よ
いるハ今ゝく窮しきあり衣食よ乏しく多己よあるを日れ
まうけさるをしいぐしゆふ心より空めて芸廣あるとゝも
寡しまゐうするあるとゝゆふ空墨云いふもあんぢゞ寡
しまたゞハず古云天妄録の民を生ぜゞ以て年ごろ学
をつとめ業をなげこゝを苦しめられど今ゝゞ郷ゝれずしく
窮迫ごゝよ死りこのゝ人ハ餓死の芸修より外ゝ然れども汝
ハ他よ仕をゆともるとも忍れいさゝの恨もかしといふよ吉
助云事ごゝよせまりて退くこゝのゝいゞ者の言ハとひゃさ

ゞ僕も同しく心底ありとてひとゝ日やゞ日とゝるゝちよちゃ
食ゆ飢ゝを苟三日よおよびゝとゝども空墨ハ常ゝゝすす
してこゞ老子自ゝ死やゝめゝ吉助ハいゞゞとゝひゝゞふ
わどゝよ言葉ゆ事ゆをこゝとのありて云ゝ小児の急
疾を救ひたまゝしく謝物とゝ金三方をさしおきくゝ
かれば吉助よゝこびてやゞく空墨ゞ申人よ来り今日ハ米
をゝとゝ飯をうきまゐんとゝよ空墨ゝ何をあゝゝゝ
戯言をゆふゞと以ゝよ吉助者ゞのよしを述ゝさゞ
この空腹へ飯を言ゝとゝくゝまつ粥をきゝのおゆ湯を
飲ゝ者ゞゞゞく粥をたべさて好よ飯を食ゆゞくゝ
日れゝゝ沒ゝ主人飯を食くゝゆゝ又言葉よ地とゆふれ

あり佐二郎とゝふ両人ありさてゝふやう
一昨年　公方の主用まく本國へ歩行のをりゝ途中まく
急病難義あるをたゝく来ゝ見ぬ治療をうけ一命を
拾ひぬ謝儀中のぶゝよ詞れ〳〵ゝあれどやむをえず
してそのまゝまゝ登ゝこのゝ出府いたせ〳〵よりていそ
ぎ参ゝく拾ひ参ゝとて二国金を急便として出〳〵さて云や
うこのゝ彩ひこ友病者のゝ仏とぞ学やるゝ〳〵んやいゝまとや
ま吉助ゝのまゝ空量ゝまやゝればさゝぶ主人まこゝゝ應對せん
とて佐二郎を居間まに請じゝまよ主國ゝそあれ奥まハ障子
ふすま一枚もまく重ゝまゝゝ起居のたゝりまでゝまて家具
もあゝゝされば佐二郎ゝもちおどろゝゝものゝゝまゝ出まつき



乃治療をうけゝきまゝ〳〵傷まと彩と いゝまよ空量ゝ云ゝゝらゝゝど
くのてゝおれば仏の身ゝて病と称〳〵くいでゝこのまゝまゝく
〳〵ゝば歩まを参ゝ〳〵ゝ来ゝ〳〵ゝこのゝど食まよ飢て只今術
食事せ〳〵ゝゝどゝおれば苦〳〵ゝゝて歩行ゝゝ〳〵ゝ駕籠を
やとひゝおれゝ〳〵と云ゝゝふ佐二郎ゝ云ゝゝまゝやまよ雨引まふと
のゝれ〳〵さまよ実ハゝゝゝ主人の病ゝとゝゝ〳〵ゝ重衆医重をゝゝ
すまゝ仕まゝ〳〵とてゝおもゝ元ゝゝ出ゝゝゝ行後をゝゝのゝ駕籠
まゝゝをゝゝゝ来ゝゝ使ひ行ゝゝゝ空量ゝゝゝゝゝゝゝ仕業
方やまひまよ適中せ〳〵まやゝゝの主人の疾病すゝやゝふ平癒〳〵て
ゝゝゝされハ男衆のゝゝゝゝゝ飢渇ゝゝゝをゝゝゝゝゝゝゝ
て品川町まよ家をゝとゝゝゝゝゝ住〳〵発ゝゝゝ時ゝゝゝゝゝゝゝ